

第三学年生活綴り方指導案

授業者 山本 真紀子<高知>

1. 指導題目 『だいじなことを読み手に伝わるように説明する』

2. 指導にあたって

○これまでの歩み（文集を中心として）

子どもたちは1年のときから同じ顔ぶれで37名のクラスである。出会った当初から日記活動を継続しながら、生活綴り方を志向して一枚文集を発行してきた。だが、子どもたちの選んで綴ってくる題材は、「休日に〇〇へ遊びに行ったこと」「家で飼っているペットのこと」

「お家の人と買い物に行ったこと」等がほとんどで、生活の土台への関心はうすかった。そこで、自分の常日頃の生活のなかから取材をし題材を選ぶことの指導を重視してきた。具体的な指導としては、他学年の生活綴り方の読み聞かせをするなかで、ねうちのある題材とは、特別にどこかへ行ったときのことでなく、自分の常日頃の生活のなかにこそあるのだということをお知らせすることから始めていった。

2学期には自分の書いてきた綴り方の題材をもう一度見直すために、一人ひとりの題材一覧表を作り、題材を幅広く選ぶことへの意識づけを行ってきた。また、題材ノートを持たせ、常時、取材をすることも忘れないようにしてきた。

表現のしかたの指導については、当初から徹底して展開的過去形表現を求めてきた。しかし、全体的に書き出しの一文から「今日、ぼくは〇〇しました。」と書き始め、その後まとめて思い出したり、文末が説明形で「～します」といったような文ばかりをつないで書く傾向が強かった。そこで、書き出しの一文の指導を重視し、まとめた書き出しにならないように、聞いたこと（言ったこと）、見たこと、したことから書き始めることの授業を行った。また、読み聞かせの際の文話による指導と、子どもとの共同の思い出し直しの場を多く取り、継続して指導してきた。

このような指導の中から、少しずつだが生活に関心を寄せた生活綴り方も生まれてきている。

○課題

現時点においては、ほとんどが展開的過去形をふまえながら表現できるようになってきているが、個人差があり、まだまだきめ細やかにある日ある時のひとこまを綴る力は全員にはついていない。また、家族でそうじをしたこと、おじいちゃんの仕事を手伝ったことなど、一見生活を綴っているように見えるが、自分のしたことを書くだけで、「そこで感じ取り考えたことがあったからそのことを書く」という「綴る意志（ねうちに向かう心）」の表れた綴り方を書くところまではまだまだである。

だが、一枚文集の読み聞かせをするなかで、友だちの生活を知り、その生活のなかから生まれた感情や考えや感じ方に共感したり学んだりすることはできている。そして、自分の生活のなかにも同じような経験はないか、さがして綴ろうとする子どもも増えてきている。

今課題となることはふたつある。ひとつは、◇ものごとに対する関心のよせ方をより積極的（ねうちに向かおうとする生活のしぶり）にすることであり、もうひとつは、◇展開的過去形表現を中心としながら、さらにくわしく読み手に伝わるように綴ることである。

○教材（綴り方）と学習の意図

今回学習する綴り方は、ゆうきくんの「お母さんのかたもみ」である。この作品を書いた当初、かたもみの場面も展開的過去形で書いていたが、推敲指導をする過程で、かたもみは「いつものことであり、今も続いていること」なのだを確認された。そこで、ゆうきくんと話し合いながら、かたもみの場面は総合的説明形で書くことにした。

また、三歳の時からお母さんとふたりで暮らしてきたゆうきくんにとって、お母さんと一緒に過ごすかたもみの時間は、だじな親子のつながりを確認するひとときである。しかし、そのことがゆうきくんだけの自己満足に終わらせないためには、お母さんのことをも説明しなければならないと考え、お母さんのことで知っている限りのことを説明するように要求して綴らせた。

今回の学習は、このふたつの説明形の文章を中核としながら、読み手に自分のいつもの大事な生活をよく知らせるための表現のありかたを知らせることで、元気者のゆうきくんの生活のようすをクラスの子どもたちに共有させたいと思う。

3. 指導目標

- 元気なゆうきくんの家庭生活での寂しさと喜びを読み合う。
- 展開的過去形の文章の中に、総合的説明形の文章をはさみこむことの効果を知る。

4. 指導計画（1時間）

- 綴り方「お母さんのかたもみ」を読み、いつものことを説明する意義と、その表現方法の効果について指導する。

5. 本時の指導

- (1) ねらい……指導目標に同じ
- (2) 展 開

授 業 者 の 指 導 段 階	
①	今日の学習はゆうきくんの綴り方であることを知らせ、まず説明部分を省略した展開的過去形表現だけの文章を配る。
②	「この綴り方の中にかくれているものを見つける勉強をします。」と語りかけ、綴り方を読む。
③	この綴り方から、もっとゆうきくんのことについて知りたいことを出させる。 ①たくさん出てくると思われるが、かたもみのことについて知りたいことを出させる。 ②かたをどんなふうにもどんな順序でもんだのかをゆうきくんに話させる。 ③「話した通りに先生にやってみて。」と、ゆうきくんに動作化させる。 ④動作化したかたもみは、いつもやっていることだとおさえ、それを文章に書き表したものを提示し、読ませ、いつもと違う書き方をさがさせる。

	<p>⑤子どもたちは『す』で終わっていることをあげると思われるので、いつもやっていることをくわしく思い出して書かなければならない文章では、こんな書き方をすることを知らせる。</p> <p>⑥この文章を、綴り方のどの部分へ入れるか質問した後、子どもたちに入れる場所を知らせる。</p>
④	<p>「もうひとつだいじなことがかかれています。」と語りかけ、ゆうきくんの生活について知りたいことを出させる。</p> <p>①なぜ、十時頃かたもみをするようになったのか、お母さんはどんな生活をしているのか、ゆうきくんに話させる。</p> <p>②ゆうきくんが話したことを書いた文章を提示し、ゆうきくんに読ませる。</p> <p>③この文章の中ではじめて知ったゆうきくんとお母さんのことはどんなことかを質問する。</p> <p>④このように自分やおうちの人の生活のことで、みんなにもっとよくわかってもらいたいことが出てきた時にも、『す』で終わるように書くことを知らせる。</p> <p>⑤この文章を「先生とゆうきくんは、よくわかるようにここへ入れました。」と話しながら、綴り方のどの部分に入れたかを知らせる。</p>
⑤	<p>説明部分を入れた綴り方（一枚文集）を配り、評価のことばと指導言を加えながら読み聞かせる。</p>
⑥	<p>最後に、だいじなことをぬかさずに間に入れて書く書き方があることと、こういう書き方をすればよりいっそう書き手の生活がわかるということを話してまとめとする。</p>

※教材とした綴り方作品

お母さんのかたもみ

三年 ゆうき

水曜日の夜の十時ごろ、お母さんとふたりでテレビを見ていたら、お母さんが、「ねえ、おねがいがあるけど。」とひくい声でゆっくり言いました。ぼくは、わかったあれやと思いました。かたもみか足もみやと思いました。

ぼくとお母さんは、三才の時からふたりでくらしています。ぼくのお母さんはエアロビクスの先生です。昼の間は「ビッグワン」と「エアロビクス」という所でレッスンをしています。夕方からはサロンで下着の着方を教えたり売ったりします。夜もレッスンをしたりスナックではたります。お母さんが夜帰ってくるのがおそいので、ぼくはおばあちゃんので食べてねます。

水曜日と金曜日だけはお母さんがいつも十時ごろ帰ってくるので、それまでひとりでお母さんをまちます。この日もそうでした。

ぼくはお母さんがすわっているふとんの後ろから、ふとんの中にもぐりこみました。ふとんを頭の上までかぶって横向けにねころんでじっとしました。ぼくはお母さんがふとんの上からのってこんろうかと思いました。ぼくがそうしたらいつもお母さんはのってきます。お母さんがそうするとぼくはうれしいのです。でも、この日はのってきませんでした。お母さんはつかれちゆうがやと思いました。

お母さんの、

「わかったあ。」

という声がふとんの外から聞こえました。

ぼくはふとんを出て、

「やっちゃお。」

と言いました。そして、お母さんの後ろへひざで立ちました。お母さんはぼくにせなかを向けたままテレビを見ていました。お母さんのせなかまでかかった長いかみの毛をまん中から二つに分けてかたの前へよせました。

ぼくは首のつけねをりょう手の親指に力を入れて、ギュッともみました。お母さんのかたはいつもと同じようにかたくてあまりへこみませんでした。お母さんが、

「ああ、そこそこ。」

と早口で気持ちよさそうに言いました。ぼくはもっと気持ちよくしてあげようと思って、親指に力を入れてもみました。

いつもぼくは、かたもみをする時には、まず首のつけねからもんであげます。お母さんが、

「場所かえて。」

と言うと、ぼくは人さし指から小指までの四本の指をかたにおしつけます。首の後ろの頭のつけねをりょう方の親指でおします。頭のつけねは、かたよりもかたくなっています。

それから、親指を上から下へとずらしながらおします。下から上へもおしていきます。そんな時、お母さんの頭は前へゆれます。

こんどは、手をぐうにして、お母さんのかたの首のつけねから外へたたいていきます。また外から中へたたいていきます。かた中を何回もたたきます。そのうちに手の中があつくなってあせでぬれてきます。

手の中のあせをズボンの前でふいてまたたたきました。お母さんは、

「ゆうき、かたもみの天才や。」

と気持ちよさそうに言いました。ぼくは、かたから手をおろしました。お母さんは、

「ありがとう。」

と言ってくれました。手がかかれていました。

お母さんは、お風呂に入りました。ぼくは、ふとんに入ってテレビの音を聞きながら目をとじました。ふとんの中でも手がかかれていました。

ぼくは、いつの間にかねていました。朝起きたら、お母さんはとりにねていました。